

國學院大學学術情報リポジトリ

社会科学における「科学」と「技術」：
ジョン・デューイの社会科学論をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荻田, 真司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000126

社会科学における「科学」と「技術」

——ジョン・デューイの社会科学論をめぐって——

菊田真司

アメリカ社会科学の歴史の中で、きわめて重要な位置を占めながら、しかしその評価がきわめて難しい人物の一人に、ジョン・デューイがいる。デューイのプラグマティズム哲学に対する貢献については、ここで詳述する必要はあるまい。また、とりわけ一九二〇年代以降に展開した、公衆論や自由主義論についても、多くの研究が存在している。⁽¹⁾しかし同時に、アメリカ科学史という視点から見ると、デューイは、シカゴ大学の創設期のメンバーの一人であり、世紀転換期にはコロンビア大学にその拠点を移しつつ研究活動を行った、草創期のアメリカ科学を代表するメンバーの一人でもあり、その精力的な活動によって、初期社会科学の展開に大きな影響を与えた人物なのである。

ところが、デューイが、初期のアメリカ社会科学に対して大きな影響力を持ったこと自体には、ほとんど異論は存在しないが、どのような影響を与えたのかについては、十分なコンセンサスが存在しているとは言いがたい。その背景としていくつかの要因を考えることができる。まず、デューイが抱いていた社会科学の構想そのものがきわめて断片的かつ不完全な形でしか公開されていないという事情がある。実際、ごく少数の例外的な論考をのぞけば、

社会科学そのものはデューイの直接的な分析の対象になっていない。したがって、「デューイの社会科学論」といった場合、これら少数の論考で論じられている議論だけを取り出すのか、科学論や哲学論といったより広い文脈の中で議論されている問題の特殊事例として議論するのかによって、大きな違いが生じてくることになる。第二に、デューイのプラグマティズムの性格から容易に推察されるように、社会科学が直接論じられる場合でも、それは抽象的な議論の形ではなく、きわめて現実に密着した文章の中で提示されることが多い。周知のように、*New Republic* 誌の創刊と同時に、その重要な寄稿者の一人となったデューイは、第一次世界大戦に対するアメリカの参戦問題や戦後処理の問題といった、政治的な争点に積極的に取組んだ。デューイの社会科学論は、こうした具体的な分析の中に埋め込まれているのである。ところが、こうした分析の主題そのものが、きわめて論争的な文脈の中にあるために、そこから導き出されるデューイの社会科学論も、その主題に対する解釈者自身の評価と密接に関係してこざるを得ない。そこから、まったく異なるデューイ解釈が生じてしまうのである。

本稿では、このような様々な困難を持つデューイの社会科学観の復元を試みた二つの議論を簡単に整理し、デューイをアメリカ社会科学論の中に位置づけるための前提を整理しておくことにする。デューイの社会科学論の影響範囲を確定する作業は、単にデューイ論としてだけではなく、二〇世紀前半のアメリカ社会科学の動向を理解するに当たって不可欠の作業となるはずである。もちろん、デューイのプラグマティズムの理念や彼が終生強調してやまなかつた哲学とデモクラシーとの関係の問題を考えれば、デューイの思想の驚くべき一貫性は明らかであり、したがって、デューイの思想の一部を復元しようとする本稿のような試みは、デューイ思想の全体系との関係において本来行われるべきであろう。また、デューイが社会科学あるいはそれを構成する個別の分野について、一般的な議論を展開するのは、一九一〇年代の終わりから一九二〇年代の初めに集中している。したがって、この時期が、

デューイ思想の展開において、いかなる位置を占めるものであるかについての分析も、本来は前提としてなされるべきである。これらの作業を欠く本稿の分析は、きわめて限定的なものであることに留意する必要がある。⁽²⁾

一 「科学」と「テクノクラシー」の擁護者としてのデューイ

アメリカ社会科学の歴史の中におけるデューイの位置づけに関して、比較的まとまった議論を展開しているのは、ドロシー・ロス(以下、D・ロスと表記する)である。⁽³⁾ここでは、D・ロスの議論を簡単に要約することにした。

D・ロスは、デューイの社会科学論が、アメリカ社会科学における科学主義 (scientism) 的な傾向にきわめて親和的であり、とりわけ、「社会的コントロール (social control)」を社会科学の主要な目的と考えるグループにきわめて近い位置にあつたと考える。このグループを代表する人物としてあげられているのは、エドワード・ロス(以下、E・ロスと表記する)である。まず、このE・ロスの「社会的コントロール」論について、簡単に整理してみよう。⁽⁴⁾

E・ロスによれば、社会的な秩序の成立を、共感や社交性、あるいは正義の感覚といった人間に内在する何らかの感情や観念に求める議論は、いずれもあまりに単純であり、不完全である。特に、依存的で同調的な人々で構成された小規模な共同体ではなく、相互に対立する可能性のある利益を追求する、独立の気質にあふれた個人によって形成される大規模で流動性の高い共同体においては、その困難はきわめて明白である。⁽⁵⁾そこで、E・ロスは、社会の利益と個人の利益との間に存在する根底的な対立を克服して社会を維持していくためには、個人の感情や行動

を社会的利益に見合うように修正する必要があると考える。このように、社会の秩序を維持するために、公式あるいは非公式に権威が行使される過程を、E・ロスは「社会的コントロール」と呼ぶ。「社会的コントロール」の具体的な形式は、道徳的手段と政治的手段の二つに大別することができる。道徳的手段とは、コントロール対象の道徳的感情に訴える手段であり、世論・社会的誘因・個人的理想・宗教・芸術・社会的評価などがあげられる。他方、政治的手段とは、特定の目的に到達するために選択された手段であり、法・信念・儀式・教育・幻想などがあげられる。近代西洋社会における共同性は、人間本性によって構築されるのではなく、こうした社会的コントロールによって人工的に構成されるのである。E・ロスは、これらの諸手段が有効に機能する条件を詳細に分析するとともに、それが機能する範囲を示している。

このように、E・ロスは、社会秩序が安定して存立する条件としての共同性の観念の重要性を指摘し、そうした共同性を維持・管理するための、個人の「行動の社会心理学的コントロール」を社会学の中核として定義する。しかし、そのことは、社会的コントロールによって、個人の自発性が失われてしまうことを意味しているわけではない。E・ロスの議論にしたがえば、社会的コントロールは、自己利益の極度の追求による社会の解体を未然に防止するものであって、個人の自発性そのものを否定するものではない。社会的コントロールが社会の進化にもたらす影響について、E・ロスは、このようなコントロールによって、ある共同体の内部においては、社会進化は強い少数者を選択するのではなく、極端な少数者を排除するように機能することになり、その結果、他の集団との競争の局面ではきわめて強い力を発揮することになると論じる。社会進化の目的は、「よりよい適応」(better adaptation)に転化するのである。その意味で、社会的コントロールは、競争的な自由主義を否定するものではなく、競争的な自由主義社会が健全に機能する前提条件を整備するものなのである。E・ロスの議論に特徴的なことは、そ

のような意味における社会的コントロールが、法や規律といった単なる外的強制として存在しているのではなく、道徳的な意識や宗教的意識、あるいは美的意識も含む個人の内面に基礎づけられていることである。いわば、自己利益の追求という人間本性に対応するものとして、「社会的コントロール」を第二の本性として人間の内面に位置づけることにより、個人と社会の対立は現実の対立としては発現してこないことになる。

E・ロスは、これらの分析を、歴史的事実やある種の人種理論、あるいは心理学的な研究成果等を踏まえて帰納された一般法則として提示している。それは、単に形式的な問題ではなく、彼は実際に社会がその構成員をコントロールする方法についての一般法則の主要部分を発見したと信じていたのである。そして、その知識が正しい方向に使われればよいが、間違つた方向に使われれば、あらゆる社会的秩序の崩壊を招くと考えていた。それ故、社会学者は、この「秩序の秘密」を社会の道徳的資質を管理する人々に対してのみ提示すべきであると主張することになる。つまり、一方で社会的コントロールの現実の担い手⁽⁶⁾としての教師や牧師や編集者、立法者、裁判官であり、他方で、新しい進歩のきっかけを作り出す存在としての詩人、芸術家、思想家たちのみこれらの知識が与えられるべきであると主張したのである。しかし、このことは、政治的・文化的エリートに対する知識の教授役として従属的な役割を社会学者が果たすということではない。むしろ、このような知識の教授そのものがきわめて選択的になされるのであり、それによって、社会学者自身が主体となった社会的コントロールが実現されるのである。社会学者の知識は、伝統的なエリートの持つていた知識とは異なり、専門的かつ正確な知識であり、それ故ごく少数の人にしか与えてはならない危険な知識である。それは、個人と社会との対立を解消させる一般法則なのであり、この法則によって秩序と進歩とが両立可能になっていたのである。そして、そのような一般法則に基づけば、社会がその構成員に及ぼすことのできるコントロールは、より意識的で効果的に行うことができる。こうして、

E・ロスの議論においては、この社会が全体としてその構成員をコントロールしていることと、社会学者が自らの知識に基づいて意図的に社会をコントロールすることが同一視されることになる。その結果、社会的コントロールの方法を熟知する社会学者は、社会に対して特別の権威と意義を有することになる。⁽⁷⁾

D・ロスは、こうした「社会的コントロール論」の議論の特徴を次のように整理する。ここでは、社会学的知識の目的は、ある状況における政治的判断の前提条件を明確にすることや、特定の歴史的条件下でなされた判断をより一般的なものに拡張することではなく、「科学」的根拠に基づいて政治的対立に最終的な決着をつけることである。社会学的知識は、一般法則に基づいて社会的な秩序を維持することを可能にし、結果として社会進化の速度と方向をコントロールしうるのであり、そして、社会学者は、そのような科学的知識の所有者として特別な権威を有するのである。ここには、規則決定論 (regularity determinism) 的科學觀念が明確に表現されている。そして、それが予測やコントロールの理念と結合し、その担い手としての社会学者に対する特別な社会的地位の付与という論理を生んでいるのである。このような議論の構成は、E・ロスに特異なものではない。この種の社会的コントロール論とそのテクノクラティックな応用の理念を含む「社会科学」という觀念は、十九世紀後半のアメリカ社会学の性格規定をめぐる議論の延長上にあるのである。⁽⁸⁾

さて、このようなE・ロスの「社会的コントロール」論に対してきわめて近い立場にデューイは位置していると、D・ロスは主張する。デューイは、「社会と歴史に対する合理的なコントロールを可能にする実証的な知識を、社会科学は生み出すことができるという、ロスの中心的な前提の主要な支持者であった」⁽⁹⁾。デューイは、哲学がそれ自身、社会的実践を指向した一種の社会科学でなくてはならないと考えていた。その関心領域は主として「心理学および社会倫理―後者の中には、行動の指針を与える限りにおいて関係する現実的社会諸科学が含まれる―」に

なるはずである。⁽¹⁰⁾ その際、その方法は自然科学的な方法でなくてはならない。なぜなら、「メカニズムの相互連関の一部として事物を提示する」能力のある自然科学の方法によつてのみ眞の知識は生み出され」るからである。そして、デューイは、自然科学的な方法を社会科学に適用することによつて、倫理的領域におけるコントロールを増大させることができると考える。そのコントロールの性質と範囲は、自然秩序の知識を用いた物理的自然のコントロールと対比してとらえることが出来る。ここでデューイは、「コントロール」という概念を中心におくことによつて、自然科学と社会科学の区別を廃棄し、両者を連続的にとらえようとしているのである。デューイの次のような比喩は、このような「コントロール」概念を結節点とした社会科学と自然科学との連続的把握という彼の社会学観をよく示している。「もし教師が、建築家を訓練するように訓練されていたならば、もし学校が、大工場が化学や自然科学の基礎の下に運営されているように、心理学的基礎に基づいて現実に運営されていたならば、このような問題について議論することなど夢にも思わなかつたろう」。⁽¹²⁾

このようなデューイの議論が示しているのは、テクノクラティックな社会科学構想に対する明確な支持であるとD・ロスは主張する。つまり、デューイの科学観は自然科学をモデルとした規則決定論的な色彩の強いものであり、そのような科学による探求の結果得られる知識を技術として応用することによつて、社会の、より具体的に言えば社会的倫理のテクノクラティックなコントロールが可能になるのである。⁽¹³⁾

さらに、D・ロスは一九二八年にデューイが発表した『確実性の探求』⁽¹⁴⁾こそが、デューイのプラグマティズムの古典的な宣言であると同時に、一九二〇年代の社会科学者たちの信条の哲学的表現であると主張する。この著作の中で、デューイは、変化する自然界に内在・外在する、永遠普遍の真理を求めるといふ古典的な戦略によつては、世界の継続的な変化を十分にとらえることはできないと主張する。不確実性の中で生きているというリスクこそ

が、人間の条件の中心的なものであり、そうであるからこそ、あらゆる西洋思想は確実性の探求へと駆り立てられてきたとデューイは考えるのである。そして、そのような西洋思想の流れに抗して、デューイは、「固定したものに付随する確実性」ではなく、「変化の中の安定」(security in change)に目を向ける「コペルニクスの革命」を主張する。「変化の中の安定」は、実用的な知性の行使、すなわち「探究」(inquiry)によってのみ可能になる。そして、そのような「探究」を可能にするのが、科学的方法なのであり、そのような方法に基づく時にのみ、「問題状況を解決する手段としての行為」をなすことが可能になる。デューイにとって、知性は歴史的時間の流れの生み出す不確定性に抗して介入するものとして理解されている。⁽¹⁵⁾このような歴史意識は、一九世紀後半以来のアメリカ社会科学の流れの一つの到達点として理解することが出来ると、D・ロスは主張するのである。

二 「反科学主義者」としてのデューイ

以上のようなD・ロスの見解に対して、真つ向から異議を唱えているのが、ピーター・マニカス⁽¹⁶⁾である。マニカスは、D・ロスがテクノクラティックな「コントロール」概念と、それに親和的な特定の実証主義的科学観を前提としていることを指摘した上で、デューイの「科学」概念や「コントロール」概念は、それとは異なるものであると考えるのである。その結果、デューイの社会科学論の具体的特徴としてあげられるのは、第一に、デューイは、事実と価値の峻別可能性を自明の前提とする、既存の社会科学に対してきわめて批判的であり、むしろ「科学と常識との間」の差異を消去することを主張していたこと、第二に、確かにデューイは、自然科学と社会科学の境界を除去しようとしているけれども、それは「社会科学の自然科学化」ではなく、逆に「自然科学の社会科学化」とで

も呼ぶべきものであり、したがって、彼自身の社会科学構想は、実証主義的な法則性や因果性の観念には依拠してはいないこと、の二点である。以下、マニカスの主張を順次検討していく。

マニカスは、D・ロスが、確認された斉一性としての法則あるいは法則的な言明によって予測を行うものとして「科学」を理解していると主張する。そして、そのような理解に立てば、E・ロスのように、その法則性を利用した予測やコントロールを、「科学」の実践的な目的と理解する態度が生じてくることになる。⁽¹⁷⁾このような「科学」理解にしたがえば、そのような法則を応用する目的についての考察は、「科学」の一部を構成しないので、所与であるかまたは仮定されることになり、「科学」の領域では、最善の手段の選択だけが問題となる。社会「科学」者は、自分の研究の実践的な帰結や目的について考慮する必要はなく、したがって、価値中立的に研究を進めることが可能になるはずであり、それ故、その結果得られた知識は特別な権利を有することになる。しかし、このような目的を排除した「科学」主義こそデュイがもつとも厳しく批判したものであることをマニカスは指摘する。⁽¹⁸⁾そして、この「科学」概念についての誤解によって、D・ロスはデュイの「コントロール」概念の持つ独自の意味を理解することが出来ず、表面上類似している「社会的コントロール」論と安易に同一視するに至ったと考えるのである。

このようなD・ロスの誤解は、デュイの科学的認識論を解釈する時点ですでに生じているとマニカスは主張する。上述のように、D・ロスはデュイがきわめて早い時期から、価値と事実を峻別し、もっぱら事実的領域のみに関わるものとして「科学」を定義し、かつ、価値すなわち目的とは無関係に社会的コントロールを実現する中立的な手段として社会科学を構想したと考えている。しかし、マニカスは、デュイの社会科学論は、そのような「科学」概念とは無縁のものであり、むしろ価値と事実の二分法の徹底的な否定から出発していることを指摘する。

すなわち、デューイにとって社会科学とは、「一般的でそれ故抽象的な哲学的方法を、有用な特定の方法へと変換する試みを表すものである」⁽¹⁹⁾。つまり、「哲学の社会科学化」とは、「価値の本性一般の探求から、万人の人生において実現されるべき特定の価値の探求への、そしてまた、この実現が可能になる条件の探究への変化」⁽²⁰⁾を意味するのである。そして、ここでは探求の対象は、事実ではなく価値そのもの、手段ではなく目的そのものである。デューイの社会科学において、価値と事実は分かちがたく結びついているのである。そうであるからこそ、社会科学は「われわれの真の利益と目的およびその関係についての洞察を与え、また、われわれの真の利益の実現を妨げている現下の障害の理解を助ける」⁽²¹⁾のであり、「誤解を排し、社会的世界を人々の要求と目的に添った形で再構成する力を与えるというまさにその意味において、解放的な力を有しているのである」⁽²²⁾。

このようなデューイの科学に対する見解からすれば、現存する「社会科学」に対する見方は批判的なものにならないを得ない。第一に、価値中立性あるいは理論と実践の峻別に対する批判である。デューイは、「道徳的偏見、すなわち正誤、善悪の理解」に基づいて社会的な判断をすべきではない、という原則自体は妥当なものと考えられる。しかし、それは、目的についての評価をあらかじめ排除すべきであるという原則ではない。むしろ、「得られるべき目的(考慮された目的)こそが仮説の本質であり、仮説は手段としての現存する条件との厳密な相関性において、形成され検証されなくてはならない、という理論と実践の双方における認識こそが、社会的問題を扱う現在の習慣を変更することを可能にする」⁽²³⁾のである。

さらに、このような事実と価値を分離する結果、「現存する問題の主要な特徴は明らか」であると仮定されることになり、「問題状況を解決するための方法として、構想や計画が、実施される材料の明確な理解なしに提案され」⁽²⁴⁾、それはしばしば状況を悪化させることになる。デューイは、問題に対する十分な分析を行うことなく、そ

れに対する対症療法のみを提示する「社会科学」と、前科学的段階の医学とを比較して論じている。「健康の回復を目的とする治療手段の選択は、問題あるいは病気を構成する条件ができるだけ完全かつ正確に特定されるまでは、無計画なものとなされる」⁽²⁵⁾とすれば、現在の「社会科学」は、まさにそのような「無計画」な治療法を提起するだけなのであり、それがうまくいった場合でも、それは偶然以外の何ものでもあり得ない。

こうした「社会科学」における歪みは、「自然科学をモデルとするという理由なき信念と自然科学そのものの誤った理解に起因している」⁽²⁶⁾とデューイは主張する。「社会科学と称するもの」に採用されている方法は、デューイにいわせれば、真の科学の単なる形式だけである。なぜなら、それらは「自然科学において、その状態や力の観察と測定を可能にしている論理的条件を観察することに失敗しているからである」⁽²⁷⁾。それ故、「社会科学」において集積される事実は、自然科学的な観察事実としては意味をなさない。なぜなら、「それら(観察事実)と人間の必要との間にある関係や、それらが人間の価値に対して持つ影響が無視されているので、理解可能な全体へとそれらをまとめ上げるものが存在しないのである」⁽²⁸⁾。

上述のように、デューイの「科学」概念は、単なる方法ではなく、その方法が適用される目的を含めた概念である。より正確に言えば、「身体的な道具と目的や理念との双方を含む新しい実体を創出し、検証すること」である。このように、手段と目的の総体に関するものとして「科学」と規定してしまえば、それは、日常的な探究のより洗練され、発展した形式であるという以上の意味を持たなくなる。したがって、デューイは、「常識と科学との間」に明確な分割線を引くことを拒否する⁽²⁹⁾。また、このような「科学」概念に立てば、デューイの用いる「コントロール」の概念は、何かに服従したり、何かを支配したりすることを意味しない。デューイが明確に述べているように、「コントロール」とは、「知識を巧みに適用するわれわれの能力」を意味しているのである⁽³⁰⁾。デューイの議論

にしたがえば、すべての探求が直接的な実践的目的を持つという意味において、常に「科学」は「技術」である。しかし、そのことは、人間が自然を支配することが可能であるとか、支配すべきであるとか、そういう意味合いをいっさい有していないのである。すべての認知活動は、問題状況を「コントロール」するために、言語、数学その他様々な人工物が必要とされるという意味において「技術的」である⁽³¹⁾。

さて、このようなデューイの特殊な「科学」概念が成立する背景として、マニカスは、デューイにおける法則の概念と因果性の概念の問題をとりあげる。そもそもデューイは、法則決定論的な自然科学理解そのものに対して否定的なのである。デューイは、「科学的法則は出来事の斉一で無条件の連続の定式化である」という観念、および「因果性は、そのような連続性のうちに定義されなくてはならない」という観念を否定している⁽³²⁾。このような厳密に法則的な因果性の観念を否定するからこそ、「常識と科学の連続性」という彼の議論が成立しうるのである。その結果、デューイの科学論の中では予測と説明とが対称ではなくなる。すなわち、予測の妥当性を確保するために必要な説明と、科学的説明とは意味が異なってくる⁽³³⁾。デューイがいうように、「科学的探求の観点からすれば、……予測は問題の素材でしかない⁽³⁴⁾」。つまり、科学的問題とは、よりよい予測をするためのものではない。逆に、科学的問題は、常識によって予測が可能であるような問題状況から出発して、そのような予測が可能になる条件を同定するのである。

実際、デューイの見解に基づけば、事物は常に他のものとの関連の中で存在しているのであり、ある原因から常に同一の結果が生じることが保証されているわけではない。事物の存在は、それ故、事物相互間の関係としての因果関係は、常に文脈依存的である⁽³⁵⁾。「確実性の探求」の中で、彼は、経験主義的存在論に反対しているが、それは実験的方法が、「データを対象で置き換え」てしまうからである。「データによって、それ以降の解釈のための主題

が提示」されてしまうことによつて、当の対象が他の事物との間に持つ複雑な関係が捨象されてしまうのである。「寒暖、乾湿、軽重は、現象を説明する自明の事柄ではなく、探求されるべき事柄」の**はずである**。他方、デュローにとつて、因果性は、論理のカテゴリであつて、存在論のカテゴリではない。経験主義者は、存在の場から抽象された「一般化」という抽象的な論理的性質を、現実の存在的關係であると考える点で、誤りを犯している。したがつて、経験主義によつて得られるのは、「常識から得られる連続性の観念と科学から得られる結合の普遍性の雑種の観念である」。しかし、「ある法則において不変に関連づけられているものは、出来事ではない。その関係は連鎖の一部ではない」⁽³⁷⁾のである。デュローは、ここでも明確に規則決定論的実証主義を批判している。

いうまでもなく、社会科学においては、このような因果性の文脈依存的性格がより顕著な形で表れてくることになる。マニカスによれば、デュローがこのような科学観を明示的に社会科学に適用したのは、「A New Social Science」である。この論文の冒頭で、デュローは、コントやスペンサー以来の、社会における法則性の発見を社会についての科学的探究の基本的な方針とする議論を明確に否定している。「社会的秩序は、自然法則の産物であり、それは、合理的で科学的な方法によつて解釈することができる」という観念は、「神話」以外のなものでもない。デュローは、第一次世界大戦が、この考えが「神話」であることを最終的に明らかにしたと主張する。「戦争は、われわれの社会的状況が、実際には、多数の独立して発生した歴史的諸力の集中の結果であることを明らかにした」。その結果、「現に作用している特定の力の説明やそれが生み出す特定の結果の記述以上のものと偽装するあらゆる科学や、社会的事物がしたがう基本法則を発見したかのごとく振る舞う科学、あるいはそれが提示する内在的法則は、単なる神話にすぎないのである」⁽³⁸⁾。

現に作用している「特定の力の記述」することによつては、それがもたらす「特定の帰結」を予測することは出

来ない。なぜなら、その特定の力を含む社会的な相互依存性の「メカニズム」は複雑であり、ある特定の時点においてそのすべてを解明することは、不可能だからである。デューイにいわせれば、戦争や革命のような特定の歴史現象を説明する一般法則は、本質的に存在しえないのである。それは、自然科学においても、ハリケーンや種の発生に関する一般法則が存在しないのと同じことである。かくして、デューイは、実証主義的法則性の立場に立つ、既存の「社会科学」に対して、前述したようなきわめて厳しい批判を投げかけることになるのである。

それでは、社会科学的知識とデモクラシーの関係はどのようにとらえられるのか。上述のように、マニカスは、テクノクラートあるいは「専門家」は、「大衆」が欠いている知識を持つているので、それによって社会をコントロールすることが出来るという議論をデューイが否定していたと考える。しかし、そのことは、専門家の存在、あるいは専門的知識の存在そのものを否定するわけではない。『公衆とその諸問題』の中で、デューイは、「専門家」によって回答される多くの「技術的」問題があることには同意している。「衛生・公衆衛生・健康的で適切な住居、輸送、都市計画、移民の規制と配分、人員の選抜と管理、有能な教師の適切な指導方法と準備方法、税制の科学的調整、資金の効率的な管理、その他」である。しかし、同時に、このような知識が十分に活用されるためには、その前提条件が満たされる必要がある。そして、デモクラシーはその前提条件として要求されるのである。リップマンや E・ロスのように、アメリカの「公衆」は確かに失われつつあるかもしれないが、それを社会学者が代替することは不可能なのである。したがって、われわれは、専門的社会学者による支配ではなく、専門家による技術的な統治が可能になるような民主的な公衆を作り上げていく必要がある。デューイの社会科学論の最終的な主張はここにあるとマニカスは主張する。つまり、「大社会」(great society)を「大共同体」(great community)へと変化させるために必要な諸力の分析を行い、その道を公衆に示すことこそが社会科学の役割なのである。⁽²⁶⁾

しかし、現実の「社会科学」は、そのような役割を果たしてはいない。それは、公衆を啓蒙し、解放するのではなく、むしろ現実の神秘化と曖昧化に貢献しているとデューイは主張する。彼は、「社会科学の後進性は、独立し、隔絶した部分に分割されていることに示されている」という。そして、領域の分割性は、単なる「後進性」の象徴ではない。それは、「後進性」を持続させるものでもある。それは「継続的な横断的知的刺激」が不足しているという問題ではなく、そもそも「分裂によってわれわれは原因と関係性を把握できなくなっている」ということを意味している。このような傾向は「事実集積的」で「価値中立的」な社会科学によってますます強化される。目的の探求から切り離された純粋な手段としての専門的知識の探求は、より抽象性を高めていく⁽⁴⁰⁾。その結果得られるものは、価値中立的な知識の体系ではなく、現に受容されている慣習的体系の科学的正当化にすぎないとマニカスは論じるのである。

三 デューイと社会科学

さて、これまで見てきたように、アメリカ社会科学の発展に関する通史的な研究を行っている二人の研究者から、デューイは、全く逆の評価を突きつけられている。この点をどのように考えるべきであろうか。以下では、いくつかの点に関して私見を提示した上で、デューイの社会科学論について考える手がかりとしていきたい。

D・ロスとマニカスの議論を見て、第一に気づくのは、両者の焦点の違いである。つまり、D・ロスはあくまでも他の社会科学者の理論的な背景としてデューイを扱う傾向が強いのに対して、逆にマニカスは、デューイの科学論そのものに焦点を当てていることである。このことは、D・ロスとマニカスのそもそもの問題関心の違いを示唆

している。つまり、マニカスの関心が、デューイの社会科学論そのものにあるのに対して、D・ロスの関心は、むしろデューイの議論が持った影響力に向けられているのである。例えば、ロスは、デューイを何人かの社会学者の議論の文脈の中で取り上げているが、E・ロス以外の部分に関して、マニカスは特に言及していない。そして、マニカスが無視した議論の中には、ジョージ・ハーバート・ミードのように、デューイ自身が高く評価した理論も含まれているのである。また、「社会的コントロール」論だけを考えても、もう一人の代表的な人物としてD・ロスが取り上げているハーバート・クーリーのデューイ解釈に対しては、マニカスはほとんど触れていない。リチャード・イリーの門下であり、経済学から社会学に転じたE・ロスに対して、クーリーはミシガン大学時代のデューイの教え子であり、デューイ理解もE・ロスとは大きく異なっている。その結果、マニカスの議論は、デューイ自身の社会科学観という意味では、説得力を有しているとしても、二〇世紀前半のアメリカの社会学者たちに対して、デューイの議論がなぜあれほど大きな影響力を持ったのかという、D・ロスの元々の問題関心には十分に答えられていると言えない。⁽⁴²⁾

第二に気づくのは、両者の取り上げるデューイの議論の時期的な違いである。D・ロスが依拠しているのは一九世紀末から二〇世紀初めにかけての、シカゴ大学後期からコロンビア大学初期にかけてのデューイの議論であるのに対して、マニカスが取り上げるのは、一九一〇年代後半から一九三〇年代にかけての著作群である。もちろん、その背景には、前述したように両者の関心の違いがあることはいうまでもない。マニカスのようにデューイ自身の科学的方法論という面を強調しようとするれば、『論理』なり『確実性の探求』なりに言及せざるを得ない。他方で、E・ロスなり他の社会学者たちに与えた影響という意味では、アメリカ社会科学の学問的アイデンティティの確立期と重なる、一九〇〇年代頃までのデューイの思想の方が影響力が大きい。したがって、D・ロスがこれらの論

考を取り上げるのは当然であるということもできる。その意味で、D・ロスが提示した「デューイの社会科学論」は、彼女がとりあげた社会科学者によるデューイの解釈とは別個に、彼女自身が彼らと同じ材料から再構成したデューイであるということもできよう。

そうであるとする、そもそもマニカスの批判には意味があるのかどうか疑問になってくる。マニカスのような批判が成立するためには、少なくともD・ロスの取り上げている時期とマニカスの取り上げている時期とで、デューイの思想に強い同一性を付与することができなければならない。しかし、第一次世界大戦が彼の理論形成に対して大きな影響を与えたこと⁽⁴³⁾を考えると、それ以前のデューイの社会科学観を、それ以後のものと無条件に同一視して論じるのは、無理があるのではないだろうか。マニカスの議論は、D・ロス批判として成立するための前提条件を満たしていないように思える。

第三に、上記の点と関連して、マニカスは、第一次世界大戦以後の「デューイの社会科学観」に関心を集中した結果、その時期におけるデューイの議論がおかれた文脈について、的確な解釈を提示していないように思われる。例えば、マニカスは、デューイが実証主義的事実集積的な社会科学に批判的であったことを論じる際に、そのような社会科学の代表例として、シカゴ大学でチャールズ・メリアムが展開しつつあった政治科学と、ウィリアム・オグボーンがコロンビア大学で展開しつつあった社会学をその例としてあげる⁽⁴⁴⁾。しかし、メリアムにしても、オグボーンにしても、マニカスがデューイの社会科学論に對置したような事実集積だけを目的とする社会科学を提示したわけではない⁽⁴⁵⁾。マニカスの議論は、デューイの社会科学論の独自性を強調するあまり、事態を単純化しすぎているように思える。

一九二〇年代のアメリカ社会科学における「科学主義」は、「経験主義」という表現に還元されるほど一様なもの

のではないし、それに反対する議論も、哲学的思弁であるとか、反科学主義という言い方で、総括できるほど単純なものではない。デューイの議論の影響力の大きさは、現実の社会に対する社会科学の知識の応用が、社会科学者にとってきわめて重要な関心の対象であったことを示唆している。この傾向は、D・ロスの議論が示すように、一九世紀末以来一九二〇年代まで一貫している。したがって、「科学主義」といった場合、自然科学的な観察の学として社会科学が成立することだけを示しているのではなく、そのような科学的な法則が、いかに現実に応用されるべきかについての議論によって、さらなる分岐点が存在したのである。他方、一九二〇年代にデューイが展開した議論は、自然科学的な法則が社会現象においても発見されるという前提を認めないという意味で、これら実証科学的社会科学論の外部に立つものである。しかし、デューイの議論が示すように、自然科学的な法則を社会現象において発見することは不可能であると主張するとしても、そのことは自動的に経験科学的方法論を放棄し、観念論的な議論に依拠することを意味してはいない。個別的・具体的な社会現象は、法則的な把握によっては把握できないのであり、そのような現象に対処するためには、普遍的法則の探究とはまた異なる形で経験科学的方法を援用すべきであるというデューイの議論は、一九二〇年代におけるもう一つの社会科学論のあり方を示すものとして、その影響関係を含めて、なお十分な検討が必要であると思われる。

- (1) デューイ関係の研究文献は、膨大な量になるので、ここではそのすべてを挙げることはできない。比較的最近の代表的な著作として、Alan Ryan, *John Dewey and the High Tide of American Liberalism*, W. W. Norton & Company, 1995; Robert B. Westbrook, *John Dewey and American Democracy*, Cornell University Press, 1991; James Kloppenberg, *Uncertain Victory: Social Democracy and Progressivism in European and American Thought, 1870-1920*, 1986; Steven C. Rockefeller, *John Dewey: Religious Faith and Democratic Humanism*, Columbia University Press, 1991 などがある。また、デューイの著作は、

次の著作集にはほぼ完全に収録されていない。Jo Ann Boydston (ed.) *John Dewey The Early Works, 1882-1898* (EW), Southern Illinois University Press; id. *John Dewey The Middle Works, 1899-1924* (MW), Southern Illinois University Press; id. *John Dewey The Later Works, 1925-1963* (LW), Southern Illinois University Press. 以下に際しては、すべて初出語ではなく、著作集で出典を指示する。ただし、初出年に関しては、重要な意味を持つものを、別途注記してある。

- (2) 研究史的にいえば、一九七〇年代以降、デュエニーとそのプラグマティズムに対する関心が高まりつつあるが、これらの研究は、これまでの研究とはやや視点を異にしたながら展開しつつある。この点も、デュエニー思想の全体像なり、時系列的発展過程なりと提示することを難しくしている。このような研究の例として、Matthew Festenstein, *Pragmatism and Political Theory: From Dewey to Rorty*, University of Chicago Press, 1997; Larry A. Hickman (ed.), *Reading Dewey: Interpretations for a Postmodern Generation*, Indiana University Press, 1998 などがある。
- (3) Dorothy Ross, *The Origins of American Social Science*, Cambridge University Press, 1991.
- (4) 以下の記述は、基本的には Ross, *Origins*, pp. 229-256 に示されている解釈に基づいて。
- (5) この部分に関しては、Origins の議論を以下の文献をよみて大幅に補っている。Edward A. Ross, *Social Control*, Macmillan, 1901.
- (6) 社会的コントロールの行使主体の所在を元に、E・ロスは政治体制の分類論を展開している。奇妙なことに、エリートによって権威が行使される政治体制は、“liberalism”と名付けられている。
- (7) *Ibid.*, pp. 229-230.
- (8) E・ロスの「社会的コントロール」概念は、社会学的プログラムの「応用部分」として「社会的コントロール」をとらえるウォードヤスモールの概念の強い影響下にあることを、D・ロスは強調する。*Ibid.*, p. 238.
- (9) *Ibid.*, p. 238.
- (10) *Ibid.*, p. 238.
- (11) いうまでもなく、この文脈における「コントロール」とは、「支配」「管理」あるいは「規制」という意味合いのものである。しかし、後述するように、本稿で検討するデュエニー解釈の一つの焦点がこの言葉の意味にあるので、本稿ではあえて訳語をつけずに、「コントロール」と表記している。
- (12) *Ibid.*, p. 240.

- (13) このような議論は、デモクラシーに対するデュイイの強い信頼と相容れない側面がある。デュイイは、E・ロスとは違い、「科学」が専門的なエリートだけに理解可能な「半ば秘教的なもの」ではなく、実用的な知性の洗練された形態であると考えた。したがって、科学は民主的な過程に代わるものではなく、それを強化するものと位置づけられることになる。しかし、このような見解をとったとしても、教育における社会的コントロールの主体は、依然として選択的にコントロールを実践することのできる特権的存在となりうる。
- (14) “The Quest for Certainty”, in *LW*, Vol. 4 (Originally 1929).
- (15) 「デュイイは、歴史的経路の生み出す不確実性に抗するものとしての行動の力、徳の問題を提起しているのである。共和主義的伝統における徳の概念と同様、実用的な行動としての科学の方法は、歴史の無秩序に対するデュイイの主要な対立物である。」 in *Ross, Origins*, pp. 406-407.
- (19) Peter T. Manicus, “John Dewey and American Social Science” in Hickman (ed.) *op. cit.*, pp. 43-62. なお、マンカスは、理論的な観点からアメリカ社会科学の科学主義の分極化を論じた著作を出版しており、ロスの前出書とともに、「アメリカ社会科学を考えた場合の基本的な文献となつてゐる。」 Peter T. Manicus, *History and Philosophy of the Social Science*, Basil Blackwell, 1987.
- (17) Manicus, “Dewey”, p. 42.
- (18) *Ibid.*, p. 43.
- (19) Dewey, “Significance of Problem of Knowledge”, *EW*, Vol. 5 (Originally 1897), p. 23.
- (20) *Ibid.*, p. 23.
- (21) *Ibid.*, p. 23.
- (22) *Ibid.*, p. 23.
- (23) Dewey, *Logic : The Theory of Inquiry*, *LW* Vol. 12, pp. 490-491.
- (24) *Ibid.*, p. 491.
- (25) *Ibid.*, p. 491.
- (26) Dewey, “Social Science and Social Control”, in *LW* Vol. 6 (Originally 1931), p. 64.
- (27) Dewey, *Logic*, pp. 492.

- (82) Dewey, "Social Science", p. 65.
- (82) このような「科学と常識の連続性」は、とりわけ社会科学において、深刻な影響を及ぼす。もちろん、文化的条件は、すべての探求に対して影響するけれども、自然科学においては、その影響が間接的なものにとどまるのに対して、社会科学においては、「人種、民族、階級、セクトの偏見は、非常に重要であり、その影響はある分野のどのような観察者にも見て取ることができる」。Dewey, *Logic*, p. 482. ただし、後に見るように、「そのような影響の仕方を個別に了解する可能性について、デューイは否定的である」。
- (30) *Logic*, p. 77. なお、デューイの「コントロール」概念をおよび「技術」概念の用法については、Larry A. Hickman, *John Dewey's Pragmatic Technology*, Indiana University Press, 1990 の議論が参考になる。
- (31) デューイは、探求が理解だけを目的とするというギリシヤの考えを否定していない。彼が否定しているのは、理論と実践の峻別であり、「道徳」や「実験的操作」なしにあらゆるものが理解できるという考え方である。
- (32) Dewey, *Logic*, p. 437, p. 445.
- (33) デューイは、「事物それ自体に内在する力による結果の発生」という説明が許されるとする。ただし、それは予測のための説明であり、科学的な説明とは異なる。 *Ibid.*, p. 446.
- (34) *Ibid.*, p. 446.
- (35) マニカスは「このようなデューイの見解を“realism”と呼んでゐる」。
- (36) Dewey, *Quest*, p. 80.
- (37) Dewey, *Logic*, pp. 444-445.
- (38) Dewey, "A New Social Science", *MW*, Vol. 11 (Originally 1918), p. 90.
- (39) Dewey, "The Public and Its Problem" in *LW*, Vol. 2 (Originally 1927), p. 342.
- (40) *Ibid.*, p. 342.
- (41) Ross, *Origins*, pp. 162-171, pp. 229-253.
- (42) もっとも、マニカスの論文はD・ロスを批判することにその主要な目的がおかれていることを考えると、これはやや過大な要求かもしれない。
- (43) 前述したように、デューイは、一九一五年から *New Republic* 誌の主要執筆者の一人として、積極的に活動した。それは、

単に公的な場で活動したというだけでなく、戦争前後のきわめて錯綜した状況の中で、彼自身の思想を実践に移そうとした過程でもある。デューイの思想を考える場合に、この第一次世界大戦前後の活動を無視することは困難であることは、Ryan を初め、多くのデューイ研究者が一致して認めるところである。なお、第一次世界大戦前後のデューイの活動については、Gary Ballert, *The Politics of John Dewey*, Prometheus Books, 1983 が詳し²⁾。

(44) Manicus, "Dewey", p. 49.

(45) メリアムの政治学が、単なる経験主義的政治学という言葉では説明できない要素を含んでいることを指摘したものととして、拙稿「科学」、福田有広・谷口将司編、『デモクラシーの政治学』所収、二〇〇二年、一六二―一七八頁を参照。